

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 6 月 20 日現在

機関番号：12601

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2015

課題番号：25670243

研究課題名(和文) 根拠に基づく医療面接教育方法開発のための医療コミュニケーション研究の基盤構築

研究課題名(英文) Development of research and education resources of medical communication for evidence-based education of medical interview

## 研究代表者

石川 ひろの (Ishikawa, Hirono)

東京大学・医学部附属病院・准教授

研究者番号：40384846

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、わが国における科学的な根拠に基づく医療面接教育の推進を目指し、医療コミュニケーション研究・教育の支援基盤を構築し、実証研究を促進することを目的とした。医療コミュニケーションの分析に広く用いられてきたRoter Interaction Analysis System (RIAS)のワークショップを開催するとともに、最終年度には、RIASの開発者であるRoter教授と主任コーダーのLarson氏を招聘してワークショップ、講演を開催した。また、RIAS研究会日本支部ホームページ(<http://plaza.umin.ac.jp/rias/>)を運用し、本研究の成果を含めた情報発信をしている。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to develop research and education resources of medical communication and to facilitate scientific research in this field for evidence-based education of medical interview in Japan. The workshop of the Roter Interaction Analysis System (RIAS), which is one of the most widely used methods to analyze medical communication, was organized annually. In 2015, Professor Roter, who originally developed the RIAS, and Ms. Larson, who is an expert RIAS coder, were invited to Japan to have workshops and lectures. We also run a website of the RIAS Japan, to disseminate the information related to the RIAS (<http://plaza.umin.ac.jp/rias/>) including the products of this study.

研究分野：医療コミュニケーション学

キーワード：医療コミュニケーション 医療面接教育 医学教育 相互作用分析 コミュニケーションスキル評価

## 1. 研究開始当初の背景

医師の対人関係・コミュニケーション能力に対する社会的な関心が高まる中、我が国においても、少しずつ医療コミュニケーションの実証研究や教育が行われるようになってきた。しかし、多くは単施設・小規模で実施され、臨床経験に基づく鋭い視点に基づきながらも方法論的な不十分さが残る研究や教育プログラムも少なくない。

欧米では 1980 年代から、実際の診療場面での患者と医師の会話や行動を客観的、定量的に評価した研究が行われてきた。この結果、診療における会話が、患者の健康状態や健康行動、医療訴訟の企図や医療資源の利用などに影響を与えることが明らかにされてきた。このような患者-医師間の会話の定量的分析に広く用いられてきた分析方法の 1 つが、米国のジョンズホプキンス大学の Debra Roter 教授によって開発された Roter Interaction Analysis System (RIAS) である。RIAS は、医療場面での医療者、患者・家族の会話を、その機能と内容によってカテゴリーに分類し、定量化するためのシステムである。医療コミュニケーションの評価手法を比較した研究でも高い評価を得ており、国際的に広く用いられ、200 本以上の論文が出されている。

わが国においても、本研究代表者・分担者らを中心に、RIAS の日本語版分析マニュアルを出版し 1)、RIAS を用いた研究を発表してきた 2)。また、医学部における医療面接教育の導入などに伴う、医学教育分野の研究者・教育者による関心の高まりを受け、2006 年から毎年 RIAS による分析方法のワークショップを開催している。近年では、その受講者が実際に RIAS を用いた研究を行うなど、医療コミュニケーションの分析手法として少しずつ広まり、ワークショップへのニーズも継続的に拡大している。これまでの取り組みは、研究代表者・分担者の個人的な資源に依存してきたが、今後の継続・発展のためには、この研究領域の支援基盤を構築することが必要である。

## 2. 研究の目的

本研究は、わが国の社会文化的な文脈における科学的な根拠に基づく医療コミュニケーション教育の推進を目指し、日本における医療コミュニケーション研究・教育の支援基盤を構築し、研究・教育・臨床を結びつける実証研究を促進することを目的とした。

具体的には、以下の 2 つを目的としたプロジェクトを実施した。

1) RIAS を中心とした医療コミュニケーション分析手法の普及と分析補助者の養成を行う。

2) 日本における医療コミュニケーション実証研究を集積し、医療コミュニケーション教育プログラム作成に向けた実証的根拠を示すとともに、医療コミュニケーション研究・

教育に従事する人材のネットワークを作る。

## 3. 研究の方法

### 1) RIAS 分析ソフトウェアの改良

RIAS のコーディングマニュアルは日本語訳を出版したが、分析に用いるソフトウェアは英語版のまま使用しており、表示が全て英語であることや日本語 OS の PC での不安定さが問題となっている。安定した動作する日本語表示のソフトウェアの開発、および RIAS ワークショップについて、ジョンズホプキンス大学を訪問し、Roter 教授らと打ち合わせを行う。

### 2) RIAS ワークショップの開催

これまでのワークショップを引き継ぎ、3 日間で、RIAS の概要および研究・教育における利用方法の基礎を学び、実際に模擬医療面接のコーディング練習を行う。(定員 20 名程度) また、これまでのワークショップ修了者を登録してきたメーリングリストを情報交換の場として活用していく。

3) 日本における医療コミュニケーション研究の収集と情報提供

RIAS を用いた研究を中心に、日本における医療コミュニケーション研究を集積し、文献集を作成する。RIAS 研究会日本支部ホームページ (<http://plaza.umin.ac.jp/rias/>) にも掲載する。

### 4) 研究ネットワークの形成

Roter 教授、Larson 主任研究員を招聘し、シンポジウム・ワークショップを開催することを通して、この領域の研究に対する関心の更なる広がりや新たな研究関心の掘り起こしを図るとともに、さまざまな研究分野の研究者のネットワーク作りの機会とする。

## 4. 研究成果

### 1) RIAS コーディングマニュアルおよび分析ソフトウェアの改良

研究分担者の阿部が Johns Hopkins 大学の Roter 教授を訪ね、日本における RIAS ソフトウェアの使用と改良について相談した。また、12th International Conference on Communication in Healthcare においても、Roter 教授と石川、阿部で議論した。結論として、日本語表示のソフトウェアの開発はせず英語版のままソフトウェアの動作を確認、改良しつつ使用することで合意した。英語であることの使いにくさはあるものの、実際の使用者が主に研究者に限られ、数も多くない状況を鑑みると、ソフトウェア自体を改良するためにコストをかけるよりも、ワークショップでの教育の充実を図るとともに、それを使用して何ができるのかの議論を深めることが重要との結論である。これを踏まえ、以下を実施した。

RIAS のコーディングマニュアルの日本語

訳は出版されているが、各カテゴリーの発話例がわかりやすいよう、日本語の診療場면을題材にコーディングの練習問題を作成した。ワークショップでの質問などを踏まえ、引き続きマニュアルやQ&Aの改善を行った。

また、分析ソフトウェアについて、Windows8での動作を確認した。発生した不具合とその対処方法について集積し、まとめた。対処方法については随時オリジナルの開発者であるRoter教授のところへ問い合わせもおこなった。

## 2)RIASワークショップの開催

3日間で、RIASの概要および研究・教育における利用方法の基礎を学び、実際に模擬医療面接のコーディング練習を行うワークショップを年1回開催した。

・2013年2月21-23日に東京大学で行われ、19名の受講者があった。

・2014年10月24-26日に名古屋大学で開催した。17名の受講者があった。

・2015年8月7-9日に岐阜大学で開催した。20名の受講者があった。ワークショップ内で、ミニセミナーとして、Roter教授からDesigning Research using RIAS-innovative designs -」として、RIASを用いたさまざまな研究の可能性について、Larson主任研究員から「RIAS: What's New?」としてRIASの最新の使用状況やトピックについての講演があった。

受講者によって、実際にRIASを使用した研究を実施が実施されており、論文発表もされている。

Nakayama C, Kimata S, Oshima T, Kato A, Nitta A. Analysis of pharmacist-patient communication using the Roter Method of Interaction Process Analysis System. Res Social Adm Pharm. 2016;12(2):319-26.

## 3) Roter 教授とLarson主任研究員の招聘

2015年度のRIASワークショップの開催に合わせて、医療コミュニケーション研究の第一人者であり、RIASの開発者であるRoter教授とRIASの主任コーダーであるLarson主任研究員を招聘した。RIASワークショップに一部参加してもらうとともに、並行して開催された岐阜大学 医学教育開発研究センター (MEDC) が主催する第57回医学教育セミナーとワークショップにおいて、ワークショップ「医療におけるジェンダーとコミュニケーション」およびRoter教授による講演「医療コミュニケーション研究の現状」を開催した。

### ・ワークショップ:医療におけるジェンダーとコミュニケーション

2015年8月9日(日)9:00~12:30

Roter教授、野呂幾久子、飯岡緒美を講師として実施され、10名の参加者があった。

WSでは、はじめに、「なぜジェンダーとコミュニケーションなのか」というWS企画意

図について、タスクから説明があった。それは、Roter先生というこの分野の第一人者と、海外と日本の状況について意見を交換する貴重な機会であることはもちろん、医療コミュニケーションをジェンダーの視点から見ることで、より詳細で正確なコミュニケーションの姿が浮き彫りになることを期待するというものであった。次に、概念についての共通理解を作るため、タスクから、ジェンダーという概念、一般的な会話における男女のコミュニケーション・スタイルの違いについて、整理を行った。

グループ・ワークでは、参加者が3~4名ずつ3つのグループに分かれ、これまでに行ったこのテーマに関する研究、関心の所在、身近なジェンダーに関するコミュニケーションについて感じる問題点についてグループ内で話し合い、その後、その内容を一人ずつ発表した。その際、Roter先生より適宜質問やコメントがあった。

タスクからの話題提供では、「医師をめぐるジェンダーとコミュニケーション」に関する主な研究を整理した後、Roter先生より、「医師のジェンダーは、なぜ、どのように問題なのか、また患者中心のケアとどのような関係があるのか」というテーマで講演をいただいた。特に、女性医師の割合が20%程度という現在の日本の状況は1970年代のアメリカの状況、という指摘に、ショックを受けた。最後に、「薬学におけるジェンダーとコミュニケーション」について、具体的な問題点を含めた話題提供があった。

会場での意見には、ジェンダーによるコミュニケーションの違いは言語だけでなく非言語にも表れるため、その研究や教育が必要であること、職種によりジェンダー・バランスが大きく異なっている現状(助産師は全員女性、歯科衛生士もほとんどが女性、看護師も女性が多数、薬剤師は女性が多数だが管理職は男性、医師は男性が多数派)や、その要因、それがもたらす問題について、経験に基づいた様々な意見が出された。

### ・講演:医療コミュニケーション研究の現状

2015年8月8日(土)17:10~18:10

Roter教授による講演は、RIASワークショップの参加者および第57回医学教育セミナーとワークショップの参加者を対象として「医療コミュニケーション研究の現状:革新への課題と可能性」と題して行われた。医療コミュニケーション研究における喫緊の課題と可能性について、特に日本の文脈に合わせて議論するとして、大きく次の3点の課題について話があった。

1)急速な長寿化を踏まえ、患者のケアについて何が分かっている、何を知る必要があるのか?

2)臨床医の非言語的的感受性の測定とトレーニングについて何が分かっている、何を知る必要があるのか?

3) 患者中心なケアの向上のために、何が分かっている、何を知らなければならないのか？

また、これらをまとめ、次の10年間の研究課題は、革新、文化的感受性、医療者同士だけでなく患者や家族の代表を含めた多分野の協働とパートナーシップを築ける能力によって達成されていくだろうことが指摘された。

#### 4) 情報発信の基盤と研究ネットワークづくり

ワークショップの案内やRIASを用いた研究紹介のために運用しているRIAS研究会日本支部ホームページ

(<http://plaza.umin.ac.jp/rias/>)を更新、整備しつつ継続運用した。

RIAS関連の研究などを集積し、毎年アップデートした文献集を作成し、ホームページでも情報発信している。

また、RIASワークショップ参加者のメーリングリストを運用し、この領域に関心を持つ研究者のネットワークの形成と保持に努めている。Roter教授とLarson主任研究員を招聘してのワークショップ期間中には、今後の共同研究などについての話し合いが、本研究の分担者だけでなく、参加者も含めて行われた。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

野呂幾久子、川野雅資. うつ病および統合失調症患者と看護師の会話のRIASによる分析. 精神看護におけるディスコース分析研究会誌 2014;2:15-21. 【査読有】

石川ひろの. 特集: 医学教育研究はじめての一步: 3. 先行研究に学び、活用する. 医学教育 2014;45:338-342. 【査読無】

野呂幾久子・川野雅資・伊藤桂子・片山典子・佐々木郁子. 精神看護面接における看護師の発話機能、技法、意図の関係 統合失調症患者の面接を対象としたパイロット研究 精神看護におけるディスコース分析研究会誌 2015;3:13-26. 【査読有】

石川ひろの. 医療コミュニケーション研究の方法論的議論と発展: 『Communication in Medical Care』訳書からの検討. 現象と秩序 2015; 3: 17-26. 【査読有】

[学会発表](計6件)

石川ひろの. 医学教育研究はじめての一步: 論文執筆に向けた12Tips(先行研究に学び、活用する). 第46回日本医学教育学会大会、和歌山医科大学(和歌山県・和歌山市) 2014年7月19日.

石川ひろの. 医療コミュニケーションを経験的に研究する方法としてのRIASとエスノメソドロジー: 日本の文脈の中で考え、研究実践例の検討も行う(『Communication in Medical Care』の意義: 訳書草稿を用いた若干の検討). 第41回日本保健医療社会学会大会、首都大学東京(東京都・荒川区) 2015年5月17日.

野呂幾久子. 精神看護学における会話分析の手法と活用 - 量的分析方法RIAS -. 日本精神保健看護学会 第25学術集会・総会 ワークショップ. つくば国際会議場(茨城県・つくば市). 2015年6月27日

野呂幾久子. 第57回医学教育セミナーとワークショップ. ワークショップ「医療コミュニケーションとジェンダー」. 岐阜大学(岐阜県・岐阜市). 2015年8月9日

Ryotaro Okamoto, Keiko Abe, Mina Suematsu, Hiroki Yasui, Kazumasa Uemura. Is Japanese medical students' emphatic communication sufficient to gain satisfaction of standardized patients (SPs)? Association of Medical Education in Europe (AMEE), September 4th-9th. 2015, Glasgow (UK).

野呂幾久子・川野雅資. カウンセリングにおけるカウンセラーの意図・技法・表現形式の関係 うつ病患者の会話. 第四回精神看護におけるディスコース分析研究会. 東京女子医科大学(東京都・新宿区). 2015年12月26日

[図書](計1件)

岐阜大医学教育開発研究センター編「新しい医学教育の流れ」第15巻3号 2016、三恵社、名古屋(p.175-180、S373-S388)

[その他]

RIAS研究会日本支部ホームページ  
<http://plaza.umin.ac.jp/rias/>

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

石川 ひろの (ISHIKAWA, Hirono)  
東京大学医学部附属病院・准教授  
研究者番号: 40384846

(2) 研究分担者

藤崎 和彦 (FUJISAKI, Kazuhiko)  
岐阜大学医学部・教授  
研究者番号: 60221545

野呂 幾久子 (NORO, Ikuko)

東京慈恵会医科大学医学部・教授  
研究者番号： 10242752

阿部 恵子 (ABE, Keiko)  
名古屋大学医学部附属病院・准教授  
研究者番号： 00444274

(3)連携研究者

半谷 眞七子 (HANYA, Manako)  
名城大学薬学部・准教授  
研究者番号： 40298568

飯岡 緒美 (IIOKA, Tomomi)  
国立病院機構 東京医療センター・研究員  
研究者番号： 80585852

(4)研究協力者

伊東 こずえ (ITO, Kozue)  
九州大学大学院医学研究院・技術補佐員

Debra Roter  
Johns Hopkins University・教授

Susan Larson  
Johns Hopkins University・主任研究員